

『臨床教育学研究』執筆要領

2020年6月15日

日本臨床教育学会『臨床教育学研究』への原稿執筆及び寄稿にあたっては、下記の要領を踏まえてくださるようお願いいたします。

1 原稿の字数と頁数

(1) 原稿の様式と字数

A4判縦置き横書き、本文11ポイント、37字×27行。マージンは上35mm、下65mm、左30mm、右40mmとする。

(2) 句読点

句読点については、本文においては「、」「。」を用いる。註記・参考文献においては「,」「.」を用いる。[註に文章が入る場合は、句読点については本文同様「、」「。」を用いる。] [原稿例を参照してください。]

「論文」

臨床教育学に関わる実証的、実践的、理論的研究、あるいは総説的な視野に基づく問題提起的な研究を記述したもの。

20,000字以内を基準とし、資料の提示や論旨の展開上必要な場合には、30,000字まで認める。別に、英文タイトルおよび英文要約500語以内を付す。

「実践研究論文」「事例研究論文」

実践・事例・調査にかかわる研究のうち、学問的な形式・方法としては構築途上の領域だが、臨床教育学の研究あるいは実践に貢献する内容もしくは問題提起を記述したもの。

20,000字以内を基準とし、資料の提示や論旨の展開上必要な場合には、30,000字まで認める。別に、英文タイトルおよび英文要約500語以内を付す。

「研究ノート」

研究動向、事実状況、資特等を紹介し、考察、提言を行うもの。あるいは、比較的限られた領域に関わる萌芽的な問題提起を行うもの。

20,000字以内。別に、英文タイトルを付す。

「実践報告」「事例報告」「調査報告」

現段階では研究的アプローチの対象となりにくいのが、臨床教育学の展開・深化に資するものとして今後の検討課題とすべき内容を含んだ実践・事例・調査を報告するもの。ただし、単に資料等の提示にとどまるのではなく、その意義の説明を含むものとする。

20,000字以内。別に、英文タイトルを付す。

2 字詰め

- (1) 日本語文字・括弧・記号・1文字だけの算用数字等は全角。
- (2) 2ケタ以上の算用数字・欧文等は半角。
- (3) 行頭に句読点・とじ括弧がきた場合は、前の行の行末に書く。

3 見出しの序数の付け方

- (1) 順序づけの原則；[1→ (1) →1) → (a)]
- (2) 「はじめに」「おわりに」等；原則として、見出し序数を付けない。
- (3) 見出しの序歌の後にピリオドは付けず、1マス空ける。
[例；1 臨床教育学研究の課題とアプローチの方法]

4 文献の引用

次の2つのいずれかとする。

【バージョンA】註 (Notes) を主とする場合

(ex. Notes and Bibliography : Chicago style)

- (1) 本文中の註記の必要な箇所の右肩に4分の1角の大きさの文字で片括弧でくくり、註番号を付ける。
[例]
…教師の専門職学習コミュニティへの取り組み¹⁾が進んできている。
…教師教育改革は臨床教育研究の展開とも密接にかかわっている²⁾。
- (2) 註は論文の末尾に付ける。
- (3) 句読点および記号の付け方；下記の例にならってください。

註

- 1) こうした取り組みについては、福井大学教育地域科学部附属中学校研究会編『中学校を創る： 探究するコミュニティへ』（東洋館出版社, 2004年）を参照。
[註に文章が入る場合は、句読点については本文同様「、」「。」を用いる。]
[和文の書名や雑誌名には、二重かぎカッコ（『 』）をつける。]
- 2) 松木健一「臨床的視点からみた教育研究と教師教育の再構築：福井大学教育学部の取り組みを 例に」『教育学研究』第69巻, 第3号, 2001年, p. 38.
[和文の論文名には、「 」をつける。]
- 3) 松木健一「地域と協働する実践的教員養成」『大学時報』第308号, 2004年1月。
- 4) 同上, p. 39.
- 5) E. H. Erikson, *Identity : Youth and Crisis*, W. W. Norton, 1968, pp. 37-38.
[Notesにおいては上記のように、(first nameのイニシャル, family name)の順で表記する。Referencesの場合の表記の順序とは異なる。]
- 6) Ibid., p. 39.
- 7) A. Lieberman, "Inquiring Teachers: Making Experience and Knowledge Public", *Teachers College Record*, vol. 111, NO. 8, 2009, p. 1876.
- 8) Erikson, op. cit., p. 41.
- 9) 松本, 前掲, p. 40.

【バージョンB】参考文献を主とする場合

(ex. In-Text Citations:APA style, Author-Date system: Chicago style)

- (1) 引用文の直後に（ ）を付け、その中に①著者名、②発表年、③頁をいれる。そして論文の末尾 にアルファベット順で「文献一覧」を付ける。
[例]

…教師教育改革は臨床教育研究の展開とも密接にかかわっている（松木 2002, p. 38）。

…松木（2002）は臨床的な視点から教師教育を展望している。

- (2) 同一著者に同一年発表の論文等が複数ある場合は、発去年の後に a・b 等の文字を入れ区別する。

〔例〕松木（2002a）

- (3) 文献引用の順序

本文中の同一箇所でも複数の文献を参照するときには、括弧内に著者の姓のアルファベット順にセミコロンで区切り、また同一著者については出版年順に並べて、それらをカンマで区切り示す。〔例〕（Erikson, 1968; 松木, 2002）

【参考文献】

Argyris, C. (1980). *Inner Contradictions of Rigorous Research*. Academic Press.

Dierkers, M. D., Atnal, A. B., Child, J., Nonaka, I. eds. (2001). *Handbook of Organizational Learning and Knowledge*. Oxford University Press.

Erikson, E. H. (1968). *Identity :Youth and Crisis*, W. W. Norton.

[References においては family name, first name のイニシャル(発行年), の順で表記する。Notes の場合の表記の順序とは異なる。]

——(1964). “Human Strength and the Cycle of Generation” . In E. H. Erikson, *Insight and Responsibility*, W. W. Norton.

福井大学教育地域科学部附属中学校研究会(2004). 『中学校を創る：探究するコミュニティへ』 東洋館出版社.

松木健一(2002). 「臨床的視点からみた教育研究と教師教育の再構築：福井大学教育学部の取り組みを例に」, 『教育学研究』 vol. 69, NO. 3.

Pestalozzi, J. (1916). How a child is led to god through maternal love. In A. Green(trans.), *Pestalozzi' s Educational Writings*. London:Edward Arnold.

Schön, D. A. (1991). *The Reflective Turn:Case Studies in and on Educational Practice*. New York:Teachers Colledge Press.

Zeichner, K. (1986a). The Practicum as an Occasion for Learning to Teach. *South Pacific Journal of Teacher Education*, 14(2), 11-28.

Zeichner, K. (1986b). Social and Ethical Dimensions of Reform in Teacher Education, In J. Hoffman and S. Edwards (eds.). *Clnical Teacher Education*. New York:Random House. pp. 87-108.

なお、【バージョンB】において、必要な箇所に註記を加える場合、掲載順序は、本文の後に註記、その後に参考文献を掲載する。

詳しくは 下記のサイトを参照してください。

Chicago Style <https://www.chicagomanualofstyle.org/home.html>

Apa Style <https://apastyle.apa.org/index>

原稿の例

37 字×27 行、本文 11 ポイント、マージン：上 35mm、下 65mm、左 30mm、右 40mm

そうした議論の幾つもの渦の中でも、1961 年チュービンゲンで行われたドイツ社会学会における C. ポパーの報告と T. アドルノのコメントに端を発する「実証主義論争」は、その後多くの研究者を巻き込みつつ展開され、社会学に止まらず実践にかかわる諸領域にインパクトを与えるものとなる。この論争にその初期からかかわった J. ハーバーマスは、その論争以後も、フッサール、アドルノ、ポパーらの実証主義・客観主義批判を批判的に引き継ぎ、現象学的社会学・分析哲学・解釈学・社会システム論をはじめとする諸領域の研究方法論・メタ理論をめぐる論争を重ねてきた。その持続性において、またそこで検討される研究の広がりにおいて、『理論と実践』（Habermas, 1963）・『社会科学の論理によせて』

（Habermas, 1970）・『認識と関心』（Habermas, 1968）・『コミュニケーション的行為の理論』（Habermas, 1981）をはじめとするハーバーマスの認識論・方法論的研究は、社会的実践をめぐる研究方法論への問いを進める上でもっとも重要な参照軸となっている。その総括ともいえる 1981 年の『コミュニケーション的行為の理論』の中でハーバーマスは、実践と研究について、およそ次のように基本的把握を示している。社会科学研究者は研究の焦点となる社会的な相互行為・コミュニケーションをめぐる単に「観察者」にとどまることはできず、そのプロセスへの「参加者」とならざるを得ない。傍観者として観察しうるのは、対象操作的行為に止まり、コミュニケーション的行為、コミュニケーションの中での了解過程については、それを理解しようとしてのコミュニケーションの（仮想的ではあっても）当事者として文脈を追うことなしには把握しえない。（対象操作的な枠組みを取る限り、相互主体的な行為も対象操作的な枠に還元・縮減され、その相においてしか把握されない。）ハーバーマスは、自身の実証主義批判の帰結をそう概括しながら、「この批判的見解はすでに、パースからデューイに至るプラグマティズムの科学理論の系統において展開されてきた」ものであることを改めて認めている（Habermas, 1981, pp. 160-163）。

しかし、こうしたメタ理論的な批判と提起は、実践の内部への参与とそこでの省察のアプローチが学として組織化されていくプロセス、その持続的展開を通し